

妊娠と出生前検査の経験についてのアンケート調査 (1)

—女性に妊娠と出生前検査の経験をどのように記述するのか—

○ (公財) 家計経済研究所 田中慶子
明治学院大学社会学部 石黒眞里

1 目的

妊娠の経験は医療技術の進歩によって変化している。2013年の4月からは「新型出生前診断」(NIPD)と呼ばれる新しい検査技術の臨床研究が始まった。医療技術の進展によって妊娠の経験がいかに変化し、それが女性の身体観・胎児観・医療技術観にどう影響しているのだろうか。また、子どもをもつことの意味や生命観がどのように変化しているのか。報告者らは2003年に首都圏でアンケート調査を実施し、妊娠や出生前検査の経験について質的・量的な記述をおこなった(柘植ほか2009)。それから10年が経過し新しい医療技術の進展や妊娠・出産をめぐる状況の変化をふまえ、10年前調査との比較を視野に入れて、現在の女性の妊娠をめぐる状況と出生前検査をめぐる状況とを明らかにすることを目的とした一連の調査を行っている。2013年には2種類のアンケート調査を実施した。今回はそのうち「2013年保育園調査」(以下、2013年調査と略す)から、1)女性たちの妊娠・出生前検査の経験についての記述の特徴、2)妊娠は女性にとってどのような経験か(二階堂・柘植報告)、3)超音波検査とNT検査に対する妊婦の経験(井原・白井報告)、4)母体血清マーカー検査と羊水検査の経験(菅野・渡部報告)、という4つのテーマを設定し、報告を行う。それに先立ち、本報告では、4報告共通となる調査概要を示し、回答者の妊娠と出生前検査の経験の記述の特徴を明らかにする。

2 方法

2003年調査との比較を意図し、調査協力いただいた中から園児数の多かった首都圏(都内および神奈川県)の14ヶ所の私立保育園と都内の子育て支援施設において、2013年7月に施設を通して調査票を配布、郵送にて回収した。配布数は958票、属性が不明の票を除外し、2000年以降に妊娠経験のある女性に限定した378票(有効回収率39.5%)を分析対象とする。

本報告では、回答者について基本属性や妊娠・出産に関する意識からデータの特性を確認し、自身の妊娠経験を調査票でどのように「語る」のか、その回答態度の特徴を明らかにする。

3 結果

全体12ページ、自由記述を含む広範な質問かつ大量の記述欄にも関わらず、妊娠の経過や検査を受けた／受けなかったことの振り返りや、質問を通して自身の妊娠経験についての(新たな)意味づけが行われている。質問の中でも、妊娠時の不安や、胎児の性別を妊娠中に知ることについて等の項目は、広枠の自由記述にも関わらず多くの厚い記述があった。一方で、「胎児の存在を感じた時」といった自身の認識が曖昧で一義的ではない項目、マーカー検査や羊水検査など一般的な妊娠経験から「距離」がある項目については、無回答や「わからない」「覚えていない」が多くなる。また、たとえば複数回の妊娠がある時、すべての回が同じ回答となる者や、各妊娠回の差異を強調する者などバリエーションがあったが、その理由は学歴等の属性や妊娠経験の差異に必ずしも還元できず、女性が妊娠経験を記述する、そして測定することの難しさがある。

付記：本研究は、科学研究費助成事業 基盤(B)(研究課題番号：25283017 研究代表者：柘植あづみ)の成果である。

文献：柘植あづみ・菅野撰子・石黒眞里、2009、『妊娠—あなたの妊娠と出生前検査の経験をおしえてください』洛北出版。